



矢島 渚男 選

能登恋し吹雪く折口父子の墓

鹿嶋市 津田 正義

【評】折口信夫(号は釈道空)は同性愛者としての生涯を送った大学者であり歌人小説家でもあった。愛弟子を養嗣子としたが、硫黄島玉砕で戦死し悲嘆にくれる中でも書き続け、四十巻もの全集を残した。

駅の名は能登さくら駅春を待つ

川越市 福田 真弓

【評】私も前句の墓を訪ねたことはないが、こんな駅だったらいい。

涅槃図に亡くした猫をさがす友

京都市 吉田 基子

【評】某寺の涅槃図には珍しく猫が描かれているというので探しに行っただけという。みつかったでしょう。猫はどろろとして例外なんじゃないか? 磨学者が猫嫌いだっただけ?

春埃ギリンサパンナ懐しむ

市川市 片岡 和則

ひとりの居は声を忘れて冬も

横浜市 奥沢 和子

卒業す内緒のぬけ道言はぬまま

神奈川県 石原美枝子

地球儀を回しつ戦憂ふ冬

那珂市 綿引多美子

積雪のハウスのうちをのり

会津若松市 安藤 和繁

奥吉野西行庵に初音かな

八王子市 徳永 松雄

合格子鸚哥に言葉教へをり

土浦市 平佐 悦子

高野ムツオ 選

うすらひの申し合はせたらうに消え

高槻市 村松 謙

【評】池の薄氷の欠片。数片。気づいた時には跡形もなかった。ぶり返した寒気とともに再来した冬の妖精たちが朝日を台図に、鏡き合いながら、この世から姿を消した。

帰り来て鉛筆削る受験すよ

柏市 小畑 昌司

【評】受験前夜ではなく受験後。試験をともに頑張ってくれた鉛筆への労いの姿と作者は受け止めた。終助詞「よ」が深い共感を伝える。

紅梅やみ袋提げ立ち止まる

宇都宮市 津布久 勇

【評】週に何度も梅の下を通っていたはずなのに、満開になってやっと気づいた。慌ただしい日常に流されている自省も込めて梅を仰いだ。

草萌えて埋まる土台や津波跡

小山市 松本 喜雄

「たんぽぽ」と言ってるだけで幸福感

守谷市 久保田洋二

うららかにやたらちゃんなべて丁寧語

神戸市 山口 誠

沢の草閉ちだめしま凍ててをり

青森市 松野 英昌

紙風船昔のままに葉箱

日上市 菊池 風峰

レシートへ一句書きつけ風生忌

川崎市 折戸 洋

菜箸にほどかれてゆく水菜かな

小諸市 藤 雪陽

正木ゆう子 選

寒明けや土竜の土のきのふけふ

君津市 櫻本 静江

【評】その頃になると、掘りたての真っ黒な土があとに盛りがつたていて、翌日にはそれが乾いている。まさに昨日と今日では、土の色が違う。地下では土竜が忙し。

ねねといふ子猫の未来ふわり抱く

東大阪市 渡辺美智子

【評】小さな体をふわりと抱き上げる。しかしそれは猫の一生を左右する手であり、瞬間である。これから十数年、ともに生きてゆく猫と人。

春田打少し離れてゴルフ場

神戸市 西 和代

【評】この中七を使うと、様々なバリエーションで俳句が出来る。これもその一つとして面白い。拙句にも「水の地球すこしはなれて春の月」。

金網を離るる羽毛涅槃西風

茅ヶ崎市 原田 博之

春雨や檜皮の屋根の息すなり

秋田市 進藤 利文

往きに見て還りには無し露の臺

白井市 酒井 康正

病室に春存分の陽さしかな

松戸市 和田 薫光

末黒野を揺ぐ生とし生くるもの

茅ヶ崎市 清水 吞丹

ほのかにもメタセコイアの芽吹きかな

相模原市 大谷千恵子

小鳥埋葬けふのピオラを全て摘み

川崎市 井手真知子

小澤 實 選

スコップの柄で叩き折る軒氷柱

小笠原市 高橋 広子

【評】この軒氷柱はそうとうに太そうである。握り慣れたスコップの柄で激しく叩き折るしかないのだ。握った手に響く衝撃までを感じ取る。このできる佳句である。

野蒜摘むひととき雲の影の中

川越市 大野有之介

【評】春の野に出て、野蒜を摘み遊ぶ。雲の影が流れて来て、しばらくはその影の中で摘む。まわりには家も大きな樹木もなさそう。

面接の出来はともあれ蓬餅

佐世保市 相川 正敏

【評】就職のための面接をしてきた。うまく答えられない部分もあったが、なんとか終わった。今が旬の蓬餅でも食べて、気分転換しよう。

殺処分待つ間に生みし寒卵

対馬市 神宮 齊之

今し方泥浴びし跡狼果つ

町田市 谷川 治

熱燗の出でくるまでに十分も

青森市 増田 正

こんにやろつにやろめにやろめと猫の恋

匠瑳市 椎名 貴寿

僧四人来て涅槃図を巻き下ろす

名古屋市 可知 豊親

薄氷の方へより歩きの子

行橋市 野田 文子

あのこからではないバレンタインチョコ

東京都 桜沢 順子

短歌あれこれ 石川美南 (歌人)

シールふたたび

会社で働いていて、完成したばかりの本に訂正シールを貼っている時間ほど辛いものはない。ちまちま手を動かしながら脳内反省会が止まらない。どうしてこうなる手前で気づけなかったのか。悔しい。申し訳ない。港区に雪は降らねどしんと訂正シール貼り二千枚

石川美南

という短歌を作ったのは十二年前の真冬のことで、その日は全国的に大雪の予報だったが、職場の周辺はまだ曇り空だった。古い会議机で印刷会社の人二人、無言のままシールを台紙から剥がしては貼り、剥がしては貼りを繰り返す。

それを思い出しているのは、まさに今、大量の訂正シールを前に呆然としているからなのだが、幾重にも折り重なる時間の中にときどき短歌が差し挟まれていることで、過去と現在が一瞬で結びつくような感覚に襲われ、私はまた新鮮に、ああ、もう、と頭を抱え直すのである。



題字デザイン・イラスト

福田美蘭